

第二部

兵隊・防衛隊・軍属の体験

戦時体制から終戦まで

当 山 重 信

(大正13年生、当時21歳
座喜味、屋号東徳原)

戦時体制

北飛行場の建設が始まるやいなや、兵隊や徴用人夫への食糧として、部落から供出というのがありました。

家畜は部落で何頭か割り当てがあり、みんなで負担しました。個人の負担が大きくならないように、みんなで少しずつお金を出し合い、それで間に合わせました。

村からは各行政区別に割り当てがあり、部落に割り当てられた分を部落内で調整するという具合でした。

野菜は何でも供出しました。キャベツ等の葉野菜は、中のいい部分は軍に供出し、自分達は外側の葉を食べました。

北飛行場に近い家には飛行場構築のために全琉から徴用された人夫が、強制的に割り当てされ、宿泊所になっていました。幸い私の家は座喜味でも一番北側にあり、飛行場から遠かったため、アサギもありましたが兵隊や徴用人夫の宿泊場には割り当てられませんでした。

青年学校

私は読谷尋常高等小学校の高等科卒業と同時に、4月からは青年学校で軍事教育を受けました。小学校を卒業した男の人は兵隊に行く20歳まで青年学校に通ったんです。

学校は月曜日・水曜日・金曜日の午後2時から5時までで、どんなに忙しくても行かなけれ

ばなりませんでした。女子青年は機織り等をしていました。

大湾の松田軍曹という兵隊帰りの方が青年学校専属の教練教師でした。平敷シズオさんも青年学校を担任していました。

婦人会に対して防火訓練の指導をするように言われても、自分の判断で断ることはできなくて、婦人会長とその訓練のことでけんかしたりしましたが、上からの指示だからやらないわけにはいきませんでした。

当時の村の婦人会長は棚原（屋号）の棚原ヒデさんと、座喜味の婦人会長は東山城（屋号）の喜友名ウサさんでした。「焼夷弾が〇〇に落ちた」という設定をもとに防火訓練をしました。

それから年に1回は普天間で中頭郡の合同演習もあり、その時は本物の銃も持たされました。こういう演習をしておかなければ困るということで、兵隊に行く前に基礎訓練は受けていました。

警防団

昭和18年の末頃青年学校は廃止され、各字には警防団が組織されました。

青年学校に行けなくなったので、青年達は警防団に入り、役場で馬に乗ったり、伝令等非常事態に備えての訓練をしていました。

同時の警防団長は比謝町の比嘉憲四郎さんで、座喜味は波平正康さんでした。

戦局も状況が悪化してからは私達は公民館（字事務所）に寝泊まりしていました。役場には各字から1人ずつ伝令を置いて、何かあった場合には馬を跳ばして公民館に来て、それからみんなに連絡するという組織でした。

青年団も軍隊と同様に兵隊の手がまわらない分を分担するという具合でした。

毎日繰り返し訓練していましたが、実際に空

襲（十・十空襲）がきてみると、馬での伝令等は大変難しいものでした。

土地接收

私の家は1700坪を飛行場用地として接收されたので、残ったわずかな畑では生計がたたず、飛行場建設に出ました。

立ち退きの際、さとうきびは牛・馬の餌として強制的に供出させられました。

接收する土地には赤い旗を立てて、その中は何月までに立ち退きなさいということで、芋は食べられる分はとり、大豆も収穫しました。「作物補償はするから早く収穫するように」ということでしたが、思うようには収穫できなかったですよ。

私の家は畑が残っている方だったのであまり困りませんでしたが、食べる分が無くなってくると馬車を持っている人をお願いして中城あたりから芋を買って来てもらう人もいました。残された畑からの収穫だけでは、食べる分がやっとなので、牛や馬を処分したのです。

そして昭和18年8月頃だと思いますが、読谷飛行場建設のため読谷国民学校が接收され、子供達は各字の公民館に移され、複式学級で勉強していました。

北飛行場建設

北飛行場の人夫には、一応日給がありました。トロッコを押して土運搬をすると、男は1日2円40銭、女は1円80銭でした。

作業道具のショベル・斧・鍬等は準備されていたように思います。仕事は8時から5時までで、1時間の昼休みがありました。

昭和18年から19年にかけて、国家総動員法で全沖縄、島尻や国頭の人まで徴用されて、周囲

の部落に強制的に割り当てされたようです。現場では作業班ごとに班長がいて、班ごとの競争になって、みんな一生懸命でした。

滑走路の一番下に大きな石を並べ、その上に5寸バラスとか3寸バラスとかをしきならして60cmから1mぐらいの厚さに造りました。飛行機が着陸するところを厚くしましたが、それは技師が来てその厚さの指示をしたので言われた通りにやったのです。

責任者の天野少尉は立ち話でもしようものなら、馬に乗ってとんできました。その天野少尉はすらりとしてかっよく、若い私達は軍隊に憧れたものです。天野少尉は士官学校出身で23、24歳だったと思います。

十・十空襲

十・十空襲の日は朝6時に目がさめていました。最初は演習だと思い、家の庭の木に登って見ていたのですが、飛行場の飛行機も空襲を受けて炎上しているし、空襲している飛行機を見るとアメリカの星印がついていたので、演習ではないことを知り、急いで家族を避難させました。

私の家は座喜味城跡に近かったのですが、城跡には高射砲陣地があり、高射砲は撃つには撃ったのですが、ほとんど当たりませんでした。長浜の海すれすれの低空飛行でやってくるので、そこに向けて撃つと住民が危険だという隊長の指示で撃たさなかったということを後で聞きました。

米軍は銀紙を撒いて電波を妨害していました。十・十空襲の時に北飛行場には100機ぐらいの飛行機がありましたが、ほとんど飛べませんでした。飛んで行っても残波の先でやられるしまつでした。飛行機に向かう途中で機銃掃射でやられる兵隊もいました。

十・十空襲の後住民は、イリヌクブンやジョーガーあたりのくぼ地、或はトーガーあたりに移されました。

召 集

昭和19年の10月15日に、座喜味の人十数名は出征するためナーカヌカーに集まり、そこで別れましたが、その時一緒に召集された中で生き残ったのは私一人ですね。

召集された翌日から大山の学校で訓練が始まり、3ヵ月の訓練終了後、部隊に配属され陣地構築等をしました。

負傷し野戦病院へ

昭和20年6月摩文仁の丘で負傷し、出血多量で意識不明になりました。

気がついてみると、南風原の陸軍野戦病院のベットに寝かされており「ああ捕虜になったん

だ」と思ったのですが、それからはどうすることもできませんでした。

そうして一晩はそこで治療してもらい、翌日は嘉手納の飛行場に連れて行かれ、そこで元気な人とケガ人に分けられました。

意識はあるのに動けなくて、このままだここに捨てられるんだと心配していたのですが美里（現在中頭教育事務所があるあたり）にアメリカの野戦病院があり、そこに収容されました。

そこには、捕虜になった若い軍作業員がたくさんいました。若い女の人達が傷の手当をしてくれました。それから私も少しずつ落ち着いていました。その女の人達に「イッターヤ マーヌガ（あなた達はどこの人か）」と言ったら「兵隊さんは沖縄ですか」ということになり、それから親しくなりました。その中に中城の人がいて、その人の兄さんも兵隊に行っていて「生きて帰ってくればいいんですがね」と言っていました。「でも生きていても私はケガをして歩けないし、生きていても貴方達のお世話になるば



日本軍屋嘉捕虜収容所跡の碑

かりで何も望みはないですよ」と言ったら「気を落とさないで下さい。手も足もちゃんとついていて、ケガをしているだけだから直りますよ。もうすぐ歩けますよ」と励ましてくれました。

アメリカの治療方法は負傷者の体力等も考えあわせて治療していましたね。

屋嘉収容所

治療して元気になり、歩けるようになると今度は屋嘉の収容所に移されました。6月のはじめ頃捕虜になり、屋嘉に移されたのが12月のはじめ頃でした。

ほとんどの傷はアメリカ軍の野戦病院にいた頃に見てもらっていたのですが、体の中に1カ所弾が残っていました。

家族との再会

収容所にいる間に情報が入ってきて、家族のいる人や身元引受人がいる人は、一般住民のいる収容所に行けることを知りました。

そして、妻が宜野座にいるということを聞き、昭和21年2月頃宜野座に行きました。座喜味の人や知り合いに、母や姉（波平秀）一家のことをたずねても消息はわかりませんでした。

自分は生きて帰って来ているのに、親・兄弟の消息がわからず、どうしても親を探したいということで宜野座、久志、古知屋、明治山、許田、名護を通り巡査に止められ質問されると「私は兵隊から帰り、このように包帯を巻いている状態だが、親・兄弟を探すために歩いていて、怪しい者ではありません」というふうに言っ

て探し歩きました。ケガをしていて杖をついて歩くような状態でしたが、どうしても探し出したかったのです。

誰に聞いても家族の消息がつかめず、あきら

めかけましたが、国頭村大保あたりからは部落ごとに事務所をたずねて名簿を調べ、それになければ墓場（墓地）に行つて家族の名前が書かれた墓標がないかどうかを調べて回りました。

根路銘の部落の入り口に来た時「波平常昭二才死亡」と書かれた甥の墓標を見つけ、その事務所に行ったら、農林学校出身で、姉婿である波平常吉を知っている人がいて、その人が家族の消息を教えてくださいました。

夜は山の中にいて昼は部落を回り、家族を探しあててまで1週間ぐらひかかりました。

そこでやっと家族と再会できました。塩屋に憲兵隊長がいて「私の家族はこちらにとり残されていますから、私は宜野座に復員しているのでそこに連れて行きたいんですが、何とか車に乗せてもらえませんか」と頼むと二世の通訳を通じて「OK」という返事がもらえました。その二世の世話で、根路銘から宜野座へ家族を移しました。その時は3月の末頃になっていたと思います。

宜野座に移りだんだん落ち着きを取り戻し母の体力もついてきました。その時人間というもの、同じ食べ物を食べていても安心すると体力もついてくるものだと思います。

その頃は巡査になるのは簡単だったので、最初は巡査になりましたが、地区の衛生課長だった都屋の前田善十郎さんが「巡査するより衛生課に移った方がいいよ」ということで宜野座地区の衛生課に書記として勤務していました。

読谷に移動

金武・宜野座から読谷に戻る頃、座喜味の人達はもとの部落には入れず、ほとんど波平に移動してしまいましたが、私達が読谷に移動したのは遅い方だったので、私達は高志保に移りました。



共同で標準住宅を建設する人々。(昭和20年8月頃)

それから座喜味のトーガーに移動しました。その当時の区長(当時は字代表と呼んでいた)は大名護小(屋号)の松田正和さんで私は書記でした。正和さんは戦後初代の字代表で、その頃は字事務所もなかったので、1軒の家の半分が事務所になっていました。

移動が完了してから茅ぶきの家を造り、そこでサンラー前宇座(屋号)の宇座周作さんが二代目の字代表になりました。

書記をしていた当時の戸籍は、間違っているものもあるかもしれませんので、本人の申請通りにしました。座喜味に移動してくる人がいると役所に申告をして配給を受けるような仕組みだったので、まず区事務所に登録して、書記が区長を通じて役所に登録し、配給を受け、家も割り当てられました。

8人に標準ヤー小(標準住宅)1軒の割り当てでした。5人家族は他の家族3人、4人家族だったら2世帯、7人家族だったら1人を入れるというふうに8人を基準にしていました。みんなで造った家だから、みんなで割り当てして入りました。その当時は誰も文句を言う人もなく、みんな家族のように暮らしていました。芋

を掘りに行くのもみんな一緒に行き、掘ってきた芋は1カ所に集め、みんなで分け合ったものでした。

だいたい落ち着いてきた頃、畑も人頭割りで分けました。はじめは一人あたり30坪程でした。げんのうを持って行き、班長も一緒に、端から「はい、東山内(屋号)は5人いるかはら150坪」というふうにして分け、田は1人15坪ずつの割り当てでした。その時主にその仕事に関わったのは松田正和さん、宇座周作さん、私等でした。

当時は軍作業で戦果をあげるのに一生懸命で、字の仕事をする人はあまりいませんでした。私が字の仕事をしていると友達は「煙草1ボールが300円もするのに120円の手間賃でそんな仕事もしているのか」と笑われたのですが、「戦からも生き残ってきているのだからみんなのために...」と思っていました。しかし、集会をもつために酒を買うと水筒1本分で80円もしたので、その工面をする妻はかわいそうでした。そんなことで字の仕事が続けられなくなり、軍作業に行くようになりました。後任は比嘉栄次郎さんになったと思います。

(1989年7月13日採録)

三度にわたる召集

池 原 蒲 三

(大正3年生、当時31歳
楚辺、屋号牛百次小)

最初の召集

私は昭和9年に古堅小学校で徴兵検査を受けました。その時楚辺からは3人が合格しました。

徴兵検査を受けて甲種合格した人が現役として召集されますが、私も現役召集でした。戦時になってからは補充兵もいました。

私は昭和10年1月に久留米48連隊12師団に入隊し、そこで射撃や演習等の訓練を受けました。それが最初の軍隊生活でした。

ひと通り訓練が終了すると、同年兵は満州に行きました。私は補充教育を受け、留守隊要員として残ることになりました。

軍隊での生活は、朝7時に起きて、炊事兵が作った朝御飯を7時半頃食べ、その後銃剣術等の訓練を受けました。訓練の内容は日によっても違いましたが、だいたい6時頃には終わりました。その後は暮をうったりしてくつろいでいました。消灯は午後9時頃でした。日曜日は外出許可をもらって外出したりもしました。

そこには昭和11年11月までの約2カ年いました。

二度目の召集

その後沖縄に帰りましたが、昭和14年7月に再び召集令状がきて、熊本の部隊に入隊しました。その時の連隊名はよく覚えていませんが、6師団だったことは覚えています。

その時も補充兵教育で留守隊要員でした。普

通は兵隊を召集して、入隊準備をし、訓練を受けてから第1線に送られました。第一線に送った後補充兵が来ました。教育期間は1ヵ月ぐらいでした。同年兵で満州へ行った人も多かったのですが、私はその時も戦地に行かずに済みました。

2回目の召集の時は、昭和15年11月末まで1年半いました。

兵隊（現役）に行っていた時、一番辛いのは行軍でした。洋服や米等荷物のたくさん入った背嚢を背負って、久留米から鹿児島までの行軍でした。背嚢ずれができるほど重い荷物を担ぎ、久留米から鹿児島まで3日ぐらいかかって歩きました。疲れているので10分間の休憩時間でも、すぐ横になりました。落伍すると車に乗せられましたが、もちろん後で罰がありました。演習なので一般道路ではなく山道を歩きました。宿泊は3人位ずつ割り当てられ、宿が準備されていました。

軍隊では、2年兵は初年兵をいじめるし、言うことを聞かないとたいへんでした。

都城で検閲があり、天皇陛下をお迎えしたことがありました。白い馬に乗って、その時でも、一般住民も来ていましたが、一般住民は顔を見てはいけないと言われていました。兵隊は「かしら右」と号令をかけた人だけが天皇を見ることができました。

在郷軍人会

2回目の召集も終わり、再び楚辺に戻ってから、私は楚辺の在郷軍人会の会長になりました。

その頃は、旧暦の9月20日は在郷軍人分会の日で、その日はアカスクーに行って、太鼓と鐘を打って、午後は楚辺のアシビナーで在郷軍人分会で銃剣術等を行いました。

戦争が始まってからは、お祝い用の豚を殺す

にも警察の許可が要るし、演芸、ムラアシビをするにも警察の許可を得ないとできませんでした。

楚辺には駐在所があって、ムラアシビの許可を出すのは、そこにいる巡査が係のはずなのに、警察署に行きなさいと言われ、屋良にあった警察署に許可をもらいに行きました。

ムラアシビの芝居でも、筋書きを書いてくるように言われ、簡単には許可もありませんでした。カミダ節をやろうとした時は、「アタラシガイヌチ シティティミシラ...」といって刀を抜くところがあるので、許可がおりず、戻って筋書きを変えて持っていったのですが、これもだめだと言われました。何故だめなのかを聞くと、軍人なのに「アタラシガイヌチ」(大切な命)というはいけないと言われ、その部分をとって上演しました。

出征兵士が出る時は、在郷軍人分会と字の役員・青年会等が中心になって、嘉手納の駅まで、太鼓と鐘をうちながら歩いて見送りに行きました。嘉手納の駅ではバンザイをして見送りました。そして出征兵士には、千人針や日の丸にみんなの名前を寄せ書きして持たせました。私も兵隊に行っていた時はその千人針で腹巻きをしましたが、シラミがいっぱいついて大変でした。

三度目の召集（八重山へ）

更に3度目の召集令状がきて、昭和19年9月29日に八重山農林学校に兵隊として入隊しました。そこでも補充兵の教育を受けました。

八重山の於茂登岳にいて、トンネルのような防空壕や陣地を造ったりしました。八重山での軍隊生活は、非常に苦しいものでした。ジャングルのような山に小屋を造って泊まっていた。その頃から、戦局は厳しくなっていますか

ら、訓練はあまりありませんでした。

白保の飛行場に爆弾が落ちると、各分隊ごとに、昼は空襲がひどいので、夜滑走路被弾地の穴埋め作業をしに行きました。楚辺の人も4、5人いました。私は石垣では宮良部隊にいました。

夜になると台湾部隊に行って、芋や鶏を捕ってきたり、山亀もたくさん食べました。山亀はちょうどはんごうに入る大きさなので、甲羅を取って水を入れて炊いて食べました。その頃はもう、一般住民は山に避難していました。

同年兵、戦友達

一緒に召集された人で、生きて帰って来た人はあまりいません。現役召集された同年兵もいるし、予備・後備の同年兵もいましたが、一緒に八重山に召集された人達は、ほとんど死んでしまいました。読谷からは、楚辺から2人、座喜味・波平・宇座から5人一緒に召集されましたが、全員亡くなりました。

一番最初の召集の時に一緒に行った楚辺の同年兵は3人いました。そのうちの1人、師範学校を卒業した池原善次郎さんは少尉にまでなりました。漢口（中国湖北省）陥落の一番乗りということで、当時の新聞にも載りました。善次郎さんは1回は沖縄に面会のために戻って来ていましたが、結婚して宮崎に行って、また戦争の第一線に出て、少尉になって戦死してしまいました。

久留米工兵隊に行った比嘉ショウショウさんも戦死しました。現役召集されたのは3人でした。運のある人はどこであっても死なないものだと思いました。

八重山でもそうでした。マラリアにも罹ったし、白保の飛行場でもすごい空襲にあいましたが、たこつぼ壕に隠れて助かりました。私は分

隊長で12名の部下がいて、みんな壕に隠れ、ほんの50m程しか離れていない、宮古の具志堅分隊長の部隊の隠れた壕に爆弾が落ち、その分隊は全滅しました。私達は土ぼこりをかぶっただけですみました。そこから帰る時は、各個前進でバラバラに山の中を歩いて帰りました。その時にも、空襲を受けましたが助かりました。ですから死ぬ人はどこでも死ぬし、生きる人はどこでも生きるんだなあと思いました。翌日具志堅分隊の死体を探しに行きましたが、バラバラになっていて、千人針が少し残っているだけでした。

終戦～八重山での生活

そうこうしている内に、部隊から連絡があり、終戦を知りました。希望だったら現地満期もできと言われ、その頃は1日に2食しか食べられない状態でしたので、現地満期することになりました。

沖縄本島は全滅したと聞いていましたので沖縄に帰らずに、八重山で3ヵ月暮らしました。八重山では渡慶次出身の大城デンスケさんの家でお世話になりました。おじいさんは知花ヘイシンさんといって波平の人でした。デンスケさんはヘイシンさんの婿にあたり、子ども達を台湾に疎開させて2人で暮らしていましたが、そこに私が入り、男3人で暮らすことになりました。

八重山に召集された同年兵は、マラリアで死んだ人も多く、於茂登岳のあたりには住民の避難小屋があって、そこで死んだ人もたくさんいました。

私は終戦になって、大城さんの家にいる頃マラリアに罹り、死ぬか生きるかの瀬戸際までいきました。マラリアに罹るとアメリカの船で沖縄本島に送り帰されていました。私は、自分一

人では船にも乗れない程衰弱していましたので、同年兵の瀬長トクギという島尻の人に付き添ってもらって本島に帰りました。私はマラリアに罹っているので、船の中では瀬長さんとは別の隔離室に入れられました。

港川の軍病院から石川へ (家族との再会)

船は沖縄に到着し、港川にあったアメリカ軍の病院につれて行かれました。それからジープに乗せられて、泡瀬の軍病院に行き、そこで療養させてもらいました。衣服や米・マッチ等持ち物は全部取り上げられました。その時は10月になっていたと思います。

そこで治療してもらい体が回復してくると病院の食事では足りなくなってきました。付き添いのコザの女の人に「読谷の人はどこにいなあ」と聞いたら「読谷の人は惣慶・漢那・石川あたりにたくさんいますよ」と言っていたので、それならここでは食事も足りないし、逃げようと思って、病院から逃げることにしました。

その夜、病院を抜け出し、アメリカ軍の車にもぐりこみ、着いた所は運良く読谷の人がたくさんいるという石川でした。朝、車から知らんふりして降りました。

石川に着いて、係員に「ここは読谷の人がたくさんいると聞いたんですが、いますか」と聞いたら「いるよ。あんたは大湾清之助を知っているか」と言うので「知っている。一番の友達だ」と言ったら「身元引受人がいたら受け入れ出来るから、あの人を呼んでみようか」ということになり、大湾清之助さんに引受人となってもらいました。

妻も5人の子どもも母も石川にいました。てっきり死んでしまったと思っていたので、夢の

ようでした。

聞いてみると、妻達は、最初は自分の家の壕にいたが、立ち退き命令が出て、恩納村の前兼久に避難しそこで捕虜になり、楚辺のヌンドゥンチに連れて行かれ、その後石川に連れて来られたと言っていました。

米軍が上陸した時、下の子は生後3ヵ月位でした。私が家族は死んでしまっただろうと思ったように、妻も私は死んだと思っていたということでした。

(1988年12月20日採録)

入隊年月日等

蒲三さんのメモより

昭和10年 1 月20日	現役兵四十八連隊 一中隊、聯隊留守隊
11年11月30日	現役満期(2カ年満期)
12月 1 日	予備・後備
14年 7 月29日	十三聯隊補充兵二二中隊へ 歩兵十三聯隊補充隊ニアリ テ支那事变勤務ニ従事ス
15年11月30日	召集解除
19年 9 月29日	臨時召集ノタメ第二七一大 隊二同日第一中隊ニ編入 同月同日ヨリ同地付近ノ守 備
自 20年 3 月25日	至 6 月30日 夫一号作戦参 加
自 7 月 1 日	至 8 月15日

防衛隊召集

- 南部の激戦地へ -

比 嘉 実 盛

(大正5年生、当時29歳)
楚辺、屋号後上門

楚辺駐屯の部隊

楚辺の大きい家には兵隊が駐屯していました。私の家はイーガーの近くでしたので、毎日5時頃になると、北飛行場の航空隊の整備兵がイーガーに水を汲みに来ては、ドラム缶にお湯をわかして浴びていました。

私の家後上門（屋号）にも10人位機関砲隊の兵隊がいました。

アガリムイ（屋号）には機関砲隊の炊事場があり、そこで炊事班がつくった食事を、兵隊達は朝昼晩の1日3回取りに行っていました。飯上げといって食事当番が2人いて、その人達が担いで、それぞれが住んでいる民家に持って行きました。

アカヌクーの上には機関砲隊と高射砲隊がいましたが、十・十空襲後に、民家にいた兵隊達もアカヌクーに移って行きました。

防衛隊召集

私は昭和20年2月22日頃、石部隊に防衛隊として召集されました。読谷からは、楚辺・波平・喜名等から40人以上が召集されましたが、その内馬車ひきは20人位だったと思います。その人達が石川・登川・普天間の各詰め所に配置されました。

その頃の主な仕事は丸太運搬でした。山原の

防衛隊が切り出した丸太を、石川の詰め所に召集された人達が山原から石川の詰め所まで運搬し、登川の詰め所に召集された人達が石川から普天間まで運搬し、普天間の詰め所に召集された人達が、普天間から島尻方面へ運ぶというふうに、リレー式で運搬しました。その丸太は島尻の日本軍の防空壕や陣地をつくるための坑木として使われていました。

私は登川の詰め所に配置されましたので、朝7時頃登川から石川に向けて出発し、石川で丸太を約800人位積んで、普天間まで1日1往復しました。登川に帰るのはだいたい4時頃でした。

この作業は3月27、28日の空襲の頃まで続けました。空襲が来るようになってからは夜運搬するようになっていました。

浦添に石部隊の本部があって3月下旬の上陸空襲後は、そこに集結しました。その頃からは丸太運搬の仕事はやらなくていいということで打ち切りになりました。

弾薬運搬

それからは一線部隊に配属され、馬もどんどん殺されて行きました。

夜になると、浦添から宜野湾まで弾薬運びをしました。宜野湾の南上原や西原のあたりの畦や山の下の方には、弾薬がたくさん積まれていました。そこから嘉数高台の一線まで運ぶのです。朝帰ると壕の中で寝て、夜になったらまた弾を運んで、嘉数から浦添に移るまでその繰り返しでした。

弾薬を運んだ帰りには、負傷兵を馬車の所まで3人で交互におぶって行き、馬車に乗せ首里の陸軍病院まで運びました。

ある時は、千原からずっと下の棚原あたりまで、3人で1人の負傷兵を運んだのですがその

負傷兵は私達よりずっと大きくて、運ぶのが大変でした。担架があれば2人でも運べるのですが、担架もないのでゲートルをはずしておんぶしました。北海道出身の大きな人でしたが、足をやられていてその痛さのためか、話しかけてもほとんど返事はしませんでした。首里の野戦病院まで運んだのですが、多分助からなかったと思います。

爆弾を運ぶ時は監視のために銃をもった兵士がついているので、前の方だとそんなことは出来なかったのですが、一番後になる時は第一線に届けるために担いでいる爆弾を置いてくることもありました。爆弾や負傷兵をおきざりにするのではないかと監視の日本兵がついていましたので、まるで罪人のようでした。

そんなに働いても、その頃は1日に握り飯1つ位しか食べさせてもらえませんでした。

第一線からの帰りは、あちこちに日本軍が埋めた地雷があり、それをふまないように気をつけながら歩いたのでなおさら大変でした。

そのあたりは一面死体だらけで、その死体は膨張してふくれあがり、蛆虫がいっぱいついていました。

昼は戦争が激しくて、夜行動していたのでだんだん暗いのに慣れていましたが、照明弾の明かりを利用して歩きました。道は爆弾が落ちてまるで田んぼのように穴があいていましたので、そこに落ちないように照明弾が上がった時に道の様子を見ながら歩きました。道は爆弾で穴だらけでした。

所属部隊全滅

浦添に来てからは馬も馬車も全滅してしまい、読谷から一緒に召集された40人余りのうち生き残った人は少なくなっていました。楚辺の人は20人行ったうち2人しか生き残っていません

でした。波平の人はほとんど亡くなってしまいました。私達の班の班長は波平の人で与儀ケンイチさんだったと思いますが、糸洲あたりで亡くなったと思います。

嘉数は激戦地でした。浦添では、馬乗り攻撃されて多くはそこで亡くなりました。私は夜アメリカ兵の中をくぐりぬけて、逃げまわりようやく助かりましたが、一緒だった楚辺の人達は死んでしまいました。馬車は浦添でとうになくなっていました。

私がいた石部隊は浦添で全滅したので、山部隊か球部隊かはっきり覚えていませんが、そこに配属されました。

南部撤退

新しい部隊に配属された頃からは、戦況が悪化していて、どんどん島尻に下がっていききました。

弾薬庫は中頭に多く、島尻にはあまりなかったもので、弾薬運びはありませんでした。

昼は壕を探して隠れ、夜はあちこちの畑から芋を取って来て、いつも持っているはんごうに一人分ずつ炊いていました。1日に1回食べればいい方でした。新しく配属された部隊が50人位の機関砲隊でしたが、私達は部隊が違うということで、食事の面倒まではみてくれませんでした。

その機関砲隊も機関砲はやられて、一線に出ることができない状態になっていましたので、防衛隊員は部隊と一緒に行動してもいいし、別行動をとってもいいという状況になっていました。



米須海岸

喜屋武岬

そんな状態ですから、6月22日にその部隊も解散になりました。

島尻の喜屋武岬から東に行くと港川に出るので、そこには敵はいないと思い、突破しようとしたのですが、機関銃で狙われ喜屋武岬に戻りました。

突破しようとした人達は銃で撃たれて、死んでいきました。喜屋武岬には兵隊や一般住民もたくさんいました。まるで漁をする時に網で囲まれるように、追い詰められていきました。多くの人達が、手榴弾で自決していきました。

捕虜となり収容所へ

翌日、上陸用舟艇からアメリカ兵が「出てこい、出てこい」と呼びかけていました。

海岸に追い詰められるうちに、楚辺の人が6人集まり、出ていくかそれとも死ぬか相談しま

した。その中には兵隊もいて、手榴弾まで準備していましたが、どちらにしても死ぬのだったら、突破できるところまでは行って死のうということになりました。

最後はどうしようもなくなり、米兵が銃を構えて待っているところに、手を上げて出て行きました。

米兵が、手ぶりで服を脱ぐよう指示したので、言われた通り、防衛隊の軍服を脱ぎました。褌はシラミがわいてたいへんでしたのでとうに捨ててありましたから、本当にまっ裸にされました。一緒にいた楚辺の人から三角巾をもらっていたので、それを褌代わりにしました。

そこから、夕方、車に乗せられ小祿の飛行場に連れて行かれました。その車の中ではこんなにたくさんの人が一緒に殺されるんだったらしょうがないと覚悟していたのですが、そこでPW（捕虜）の服やチーズや缶詰を渡され、その時から生きのびられると思うようになりました。シャワーを浴びている間に服を盗まれた

ので、池原英徳さんが服をもってきてくれました。それから取り調べがあり住民と兵隊とに分けられ、夕飯を食べそこで一泊してから、翌日嘉手納の中飛行場に送られました。

小禄には一晩だけいて、中飛行場には2日位いました。それから屋嘉の収容所に移されそこには1週間ぐらいいました。

ハワイからサイパンへ

屋嘉の収容所からハワイに送られました。ハワイ行きの船は水釜から出航しましたが、3隻の船に捕虜がいっぱいでした。アメリカの軍用の輸送船や客船で、私が乗ったのは客船でした。私達が輸送された頃は、ハワイ輸送の初めの頃でいい船でしたが、後から捕虜になった人達は、運搬船で鉄板の上や船底に寝かされ、辛かったと後で聞きました。ハワイまでは15日かかりました。

楚辺の比嘉恒健さん達が、先にハワイに行っていて炊事係をされていて、私達が行く頃には太っていました。恒健さん達が炊事係にいるのでおかわりもさせてくれました。

そこでは、病院を建設していたので、ハワイの二世達を手伝って、穴を掘ったり、材料運搬をしたり、あるいは公園の草刈りに行ったり、ワイキキビーチの掃除をしたりしていました。

ハワイに行ってから食べ物もいっぱいあるし、殺される心配はありませんでした。ハワイには1年半いて、その後サイパンに移されそこには半年程いました。

沖縄へ

沖縄へ帰って来たのは、昭和22年の12月のことでした。

それまで家族の消息は全く分かりませんでしたし

た。結婚して子どももいたのですが、戦争で妻と生後9ヵ月の子どもを失いました。私が防衛隊に召集された後、妻の実家の家族と一緒に山原に避難しようとしたようですが、男の人がいなくて避難することが出来ず、喜名の山中に逃げ、日本軍の壕に入っていたということです。その後その壕から出て山原に避難しようとしたらしいんですが、壕のあたりでウロウロされては困るということで、そこから出られなかったようです。どうもそこでやられたんじゃないかということなんですが、日本軍にやられたのかアメリカ軍にやられたのかは今でも分かりません。

(1988年12月22日採録)

ピンクの召集令状

松 田 貞 子

(大正12年生、当時22歳、比謝町出身
旧姓岳原、実家の屋号岳原小)

軍属として召集される

私の家は比謝町でお菓子屋をしていたのですが、軍隊に入ってきて昭和19年頃になるとお菓子は贅沢品だということで軍から製造を中止するように言われました。そしてお店も家も軍が使って、私達は台所の片隅で暮らしていました。家には軍の食糧を入れてありました。

私は昭和18年9月頃軍属として召集されました。男の人は赤い召集令状でしたが、私達はピンクの召集令状でした。

球部隊の航空兵站の救急隊に配属されました。そこには沖縄人女性が8名軍属として配属されていましたが、生き残ったのは3名です。私以外の2人は那覇の1人で、1人は二世と国際結婚してハワイに行っており、1人は戦争の時の衝撃がもとで、話も出来ない状態になっています。

喜瀬武原の壕へ

航空兵站は比謝町の河原の窪みにありました。私達はそこで炊事や兵隊がけがをした時の手当て等をしていました。医療器具等は軍から支給されていました。

米軍の上陸が近づいてきたので、3月30日にそこから国頭の方へ向かいました。私達軍属は髪を切って鉄兜をかぶり、軍隊の服装そのまま、背中にも肩にも救急袋を持ち、食糧等は全然持っていませんでした。

その時一緒だったのは航空兵の下士官・見習い士官11名と、女の軍属8名、防衛隊2名で、この防衛隊というのは馬車ムッチャーでした。1人は石川の人で、1人は野国の人でした。見習い士官はほとんど本土の人でしたが、その中で具志堅中尉と伊江伍長という名前の人がいたのを覚えています。落ち着いて話をする余裕はなかったのでこの出身かはわかりません。

喜瀬武原には防衛隊が掘った大きな壕があり、3段階になっていて、下に防衛隊が入って、その上に下士官が入り、一番奥に航空兵7名と軍属8名が入っておりました。

喜瀬武原から嘉津宇岳に突破するつもりでいったのですがそれはできず、恩納岳を巡って喜瀬武原に戻ったのでした。

一緒だった下士官達は軽機関銃しか持っていませんでした。弾も底をついていました。私達も短剣と手榴弾を2個ずつ持たされていましたが、持てなくなって夜捨ててしまいました。それでも手榴弾だけは持っていました。兵隊達は銃を杖にしていました。

チ力ちゃんの死

安富祖橋を遮断すればアメリカ人は渡れないということで、護郷隊の人達が私達の所まで来て、切り込みに行くということで、山の方から見ていると、アメリカ人は橋の所にたくさんいました。手榴弾を上からそこめがけて投げました。ところが兵隊が投げた手榴弾は届いたのですが、私達が投げた手榴弾は届かず、途中で爆発し土煙が出たので、下からアメリカ兵が銃を撃って来ました。軍属である私達はその時6名になっていました。兵隊達は男なので逃げるのが早かったのですが、私達は逃げ遅れました。逃げながら「岳原さん、チ力ちゃんがいよいよ」というので探してみると、倒れていたの

で助けようと思い、2人でチカちゃんの手をつかまえているつもりが、足首をつかまえていて、2人で足をひっぱっていたのです。向かい側から那覇の人達がいろいろな荷物を担いで来て「ネーサンターヤ兵隊ルヤサヤー」と言って、その人は情報を聞きたいために私達に黒砂糖をくれました。その人達が私達がひっぱっているチカちゃんを見てびっくりしていました。その時私達はチカちゃんが死んでいるのを知ったのです。それまでは無我夢中で、チカちゃんを助けているつもりでした。

避難民からの食糧略奪

私達は第一線を一緒に歩いていました。昼はヘゴの芯を取ったりして食糧を集め、夜は行軍しました。私達がいなくなると食事にも困るのでなかなか離してくれませんでした。

避難民は夜になると山から下りて食事を作っていたので、友軍の兵隊がその避難民が作っている食事を取って来いと命令をしました。私達も食べ物欲しいのですが、同じ民間人の食糧を取ることはできないと断ると、命令を聞かないかと言われました。チカちゃんは死んでもう1人は行方不明になって4人しか残っていませんでした。友軍の兵隊が上から懐中電灯を照らして、それで下に下りて行きました。そして上で友軍が空砲を撃つと、下の避難民はアメリカ人と思って、食糧をそのままにして山に逃げました。取って来なければ私達も殺されるので、私達はその食糧を取ってきたのです。当時避難民は大変でした。昼はアメリカ人に、夜は友軍に攻撃され、アメリカ人より友軍の方がよっぽど怖かったのです。

男の人は、髪を伸ばし顔に煤をつけ女の着物を着ている人もいました。

逃亡

こうしてはいられないから逃げようということで私達4人は、昼兵隊が寝ている間にグミを取って来ると言って、そのまま自分の家族が避難している国頭に向かいました。

逃げる途中、恩納岳の中腹で、子供をおんぶしたまま、手には鍋に入ったジューシー（雑炊）を持った人が死んでいました。いったんは通り過ぎたのですが引き返し「ウサンデーサピラ」と言ってその鍋を取って逃げました。その中には蛆虫が入っていたのですが、それでもおいしかった。お椀もないからみんなで交代で鍋から食べました。そうこうしながら一生懸命逃げたつもりだったのに、結局兵隊がいるところに戻ってしまいました。兵隊達には「食糧を取りに行ったら道に迷った」と嘘を言って殺されずに済みました。

直撃弾

壕の入口に防衛隊の馬を2頭つないであったので、それを見られ防空壕の入口を直撃されたのです。2番目の壕までその弾で吹き飛ばされ、私は気を失ってしまいました。私達は一番奥の壕で伏せていたのですが、筵がわりに下に敷いてあった木の葉等も全部3番目の壕に吹き飛んできていました。気がついた時は夕方になっていて、右の耳は完全に聞こえなくなっていました。体の上にはいろんなものが乗っていました。重くてしょうがありませんでした。そこから這い出ようとしても出られませんでした。壕の入口のほうは吹き飛ばされ、その時にみんなやられて女の軍属のうち3人は生き残ったのです。その爆撃を受けたのは、ヘゴの芯を炊いただけの昼食が済んだ直後のことでした。

捕 虜

8月16日にアメリカ軍に包囲され、周囲から機関銃で撃たれ、かがんでいるところに銃剣をもって入って来ました。喜瀬武原で捕虜になりました。80名ぐらいに包囲され、逃げられなかったのも、みんな助かったのです。

私達は兵隊と一緒に屋嘉の収容所に9日間いました。少年兵だと思われていたらしく、ドラム缶のお風呂に入った時に、誰が見たのかわからないのですが、女だということがわかって、その日から私達はテントに移されました。三宅という二世が通訳に入って石川に移されました。

家族との再会

その頃母は比地にいました。母のいところが諮詢会にいたので、諮詢会のジープで迎えに行きました。私と母は石川におり、師範学校から学徒出陣した弟の宜正が復員して来て、そこで家族3人が集まりました。父はとうに戦死していました。父の戦死場所がわからないままです。比謝町より南で死んだということ以外はわかっていません。

石川に行ってから、耳のけがの治療をしてもうため、病院に行きました。日本人の軍医もいて、手続きをしたら、けがをした時の状況を証明する人を連れて来るように言われたのですが、それを証明する人は誰もいませんでした。

(1990年2月9日採録)

ひめゆり学徒隊

比 嘉 秀

(昭和2年生、当時18歳
楚辺、旧姓比嘉)

女子師範学校入学

私は昭和17年4月、沖縄県女子師範学校に入学しました。

沖縄県女子師範学校は昭和18年4月の学制改革で、校名が沖縄師範学校女子部と変わりました。

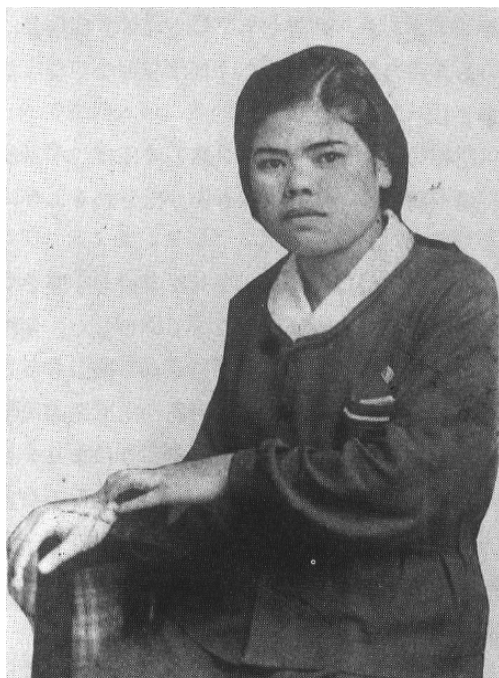
師範学校女子部には予科(3年)と本科(2年)があり、予科は1学年40人位でした。

本科には、師範学校女子部予科の卒業生と一高女(那覇市安里在)・二高女(那覇市松山在)・三高女(名護在)・首里高女(首里在)・積徳女学校(那覇市松山在)・昭和女学校等の卒業生が受験してきました。

師範学校女子部と一高女は同じ敷地内にあり、寄宿舎でも師範と一高女は同じ部屋でした。小さい部屋で7人くらい、普通は十数人が一緒に暮らしていました。師範には全琉から入学してきますから、那覇のごく近い所の人以外は寄宿舎にいましたが、教師としての資質を高めるため1年間は寄宿舎に入らなければならないという規則がありました。

昭和19年の十・十空襲の頃からは、家の近い人達は寄宿舎から出され、家の遠い人だけが寄宿舎に残りました。

昭和20年になると、沖縄師範学校女子部の生徒は、第一外科・第二外科・第三外科・本部へ、一高女は経理部に配置されました。一高女の1、2年生は家に帰されたと聞いています。ですから犠牲者が少ないのでしょうか。



女子師範学校予科1年、制服姿の比嘉秀さん
(写真提供 比嘉秀さん)

師範学校女子部の読谷村出身者で生き残ったのは、比謝町の崎新昌子さんと都屋の渡久山ハルさんと私で、3人とも戦争に参加して生き残っていますが、波平貞子さん、大湾敏子さん、比嘉ヨシさん、屋良ヨシさんの4人は亡くなってしまいました。

一高女には宮城貞子さん(旧姓又吉、比謝出身大湾在)、波平テル子さん(旧姓大湾、渡具知出身大木在)、平安貴美子さん(旧姓大湾、那覇市在)、安田ユキさん(旧姓大城、高志保出身那覇市在)、長浜ヨシさん(高志保出身、恩納村字加地在)等が在学していましたが、親元に帰され父兄と一緒に避難したようです。

南風原陸軍病院へ

期待に胸をふくらませて入学した学校でしたが、授業と並行して、なぎなたや競歩行軍等が行われるようになり、生活物資も不足がちに

なってくると、野菜や芋をつくって、寄宿舎にいる人達の食糧を補わなければならなくなってきました。

昭和19年7月のサイパン島玉砕後は、小祿飛行場や高射砲陣地構築にもかり出されるようになりました。

昭和20年にはいと、1月に学校も空襲も受けて授業どころではなくなっていました。食糧増産作業や陣地構築にかりだされる機会も多くなり、2月頃からは、週に何回か南風原国民学校に行き、看護の講習を受けるようになりました。講習といっても、止血の方法や包帯の巻き方、注射器の消毒の仕方や注射の打ち方等初歩的なものでした。第一外科の婦長さんや衛生兵が指導していました。

3月になると空襲が激しくなり、それまでは学校の東の壕に避難していましたが、24日頃には艦砲射撃も始まり、識名の高射砲陣地の壕に移動しました。

その晩軍命により、私達は南風原陸軍病院に勤務することになり、10時頃南風原に向かいました。そして南風原の病院壕の近くの三角兵舎で正式に軍属に任ぜられ、それぞれの部署で任務につくことになりました。

飯上げ

それぞれの部署に配置され、最初は壕掘りや衛生材料運搬などをしていましたが、米軍が上陸し、負傷兵が増えてくると看護の仕事が主になってきました。

その他に飯上げといって、喜屋武にある炊事場まで行って食糧を運んでくるのも私達の仕事でした。

炊事場に行くには、坂を下りていかなければならないのですが、雨が降ってぬかるんでいる上に至近弾は落ちるし、それこそ命がけでした。

炊事場まではかなり距離があり、至近弾が落ちると、ご飯の入った樽を置いて頭をおさえて伏せたので、その樽の中に土ぼこりが入り、そのまま帰ると怒られるので壕まではそのまま持って来て、壕の入口で上の土をどけて小さいお握りを作りました。

第二外科壕

私は第二外科壕に配置されました。

壕の中ははじめじめしていて不衛生で、二段ベットを置いていました。

患者の中には、脳まで菌が上がってきた脳症患者があり、自分で判断ができなくなって大小便を垂れ流すので、上の段に脳症患者がいる場合、下の患者は大変でした。衛生兵が下の段に移したりしたのですが、あばれて落ちたりしました。私達も体力はなくなって、落ちた患者を二人がかりでもベッドに戻すことが出来ませんでした。

動けない重症患者は、トイレに行きたくなると「便器を持って来い」と大きい声でどなっていました。最初の頃はその世話ができずに兵隊や看護婦に怒られました。「誰かがやらないと戦場では困でしょう」と言われ、2～3回やっているうちに別に何とも感じなくなっていました。

包帯も最初は1日か2日ごしに取り替えていたのですが、余裕がなくなってくると、膿と血で固まってしまい取り替えるのも大変でした。

大小便の始末をしたり傷の手当てをしたり食事を食べさせたりするのが主な仕事になっていました。

水をあげると出血がひどくなるということで、傷が深い人ほど水をやってはいけないと注意されましたが、「水、水、水…」と殆どの負傷兵は水を欲しがりました。「学生さん、水」

とうなっていると「はい」と言って取りにいくふりをして別の仕事をし、その場所まで帰ってくると「水はどうしたんだ」とどなられました。そんな時は脱脂綿に水を含ませて口に運びました。それくらいのことしかできませんでした。

壕の中にいる数十名の患者の1日の水はわずかに、桶の1杯分ぐらいでした。そのわずかな水も運んでいる途中に弾が落ちてこぼれたりしました。水を汲みに行くにも命懸けの状態でした。

明かりをつけると艦砲射撃的になるので壕の中は昼もうす暗くなっていました。酸素が少なくなってくると、ろうそくの火が細くなってくるのですが、その時にはみんなで「換気ヨーイ」と言って、歌を歌いながら自分の持っている下敷きやふるしき等を振って換気をしました。ろうそくの火が酸素量のバロメーターだったのです。

負傷兵はたんだん増えて行き、患者の傷口には蛆がたくさんわいていました。蛆がわくとても痛いらしく「とってくれ」とどなられました。

私達も、飲まず食わずの状態でしたので、おしっこも便もあまり出ませんでした。大小便も壕の中ではできないので、外に出て用をたしたのですが、食べ物がなかったせいかそんなに頻繁には行きませんでした。生理は全然なくなっていました。

戦死者埋葬

「天皇陛下バンザイ」と言って死ぬ人はあまり私の記憶にはなく、殆どの人は死ぬ時「お母さん、お母さん」と言って死んでいきました。中には「ここで死ぬのか」と死んでいく人もいるし「俺、死にたくない」と大声で叫んでいる人もありました。

重傷患者が多いので、毎日のように死亡者が出ました。昼は埋葬に行けないので、毛布にくるんで壕の入口に並べておいて、明け方の、艦砲射撃がちょっとやんだ隙間をぬって埋葬しました。4月のなかば頃まではまだ余裕があったので、穴を掘って埋葬したのですが、その後はそんな余裕もなくなり、近くの弾痕に埋めるようになっていました。

じめじめした壕の中で、原因不明の熱が出る壕熱がはやり、私の学友達の中にもその病気に罹る人達が出始めました。健康な人達はその人達の代わりに勤務することも多くなりました。

戦火近づく

4月10日頃までは「喜屋武方面に艦砲射撃あり」と大きな声で歩哨兵が言っていたが戦争が激しくなってからは、そんな声も聞かれなくなりました。

そして5月のなかばくらいからは、艦砲射撃ではなく、地上戦の爆撃砲等の音が聞こえてくるようになりました。敵が近づいていたのです。

第二外科壕に配置されていたので、他の壕の様子はわかりませんでした。昼は外に出られないし、勤務状態もだんだん厳しくなっていくので、よその壕に行く余裕などなかったのです。

3月25日頃から5月25日頃まで約2ヵ月第二外科壕におりました。

南部撤退

撤退の2、3日前から、壕の中では「こっちは危ないから、南に撤退するらしいよ」とひそひそと噂されていました。それを聞いた患者は「どこかに行くのか」と聞いていました。

壕を出る日は「戦争が落ち着いたら迎えに来ますから」と言って出て行きました。「歩ける

患者は連れて出なさい」ということだったので。歩けない患者はしかたなく残して糸洲に向かいました。

私は、壕熱で痩せ細った桑江清子さん（泡瀬出身）を連れて出ました。

その後衛生兵は枕元に青酸カリとミルクを置いて出て来たらしいです。糸洲に行ってからその話を聞きました。自決なさいということだったらしいのです。

私はそれを直接見ていませんが、捕虜になってから渡嘉敷良子さんから聞きました。渡嘉敷さんは南風原で負傷し置き去りにされ、ミルクと青酸カリが配られるのを見て後、そこから出たと言っていました。その後米軍に救出され宜野座の病院に収容されたとのことでした。捕虜になってから、宜野座の病院に女学生らしい人がいるということで会いに行ってみると、渡嘉敷さんでした。置き去りにされたことを恨んで、すごい目でらみつけられましたが、毎日のようにお見舞いに行っているうちに心を開いてくれました。そしていろんな話をするようになった頃その話を聞きました。彼女は痩せ細っていて、その後病院で亡くなりました。

束の間の休息

糸洲へ撤退してきてしばらくは平和そのものでした。南風原から十数kmしか離れていないのに沖縄でこんなに静かな所がまだあったのかと思うくらいでした。

2日程太陽を拝むことができました。それまで昼間外に出るようなことも無かったのですが、そこでは髪を洗ったり、浴びたりしました。

糸洲に行ってから、患者を収容する壕もなく、ついて来た負傷兵もめいめい自然壕に入っていました。その頃から看護等はまるっきりできない状態でした。

その頃まで、畑にはキャベツやにんじん等もありましたし、近くに海軍の使っていた壕があり、食糧を置いたまま出て行ったらしく、それを分けて食べました。それまで見たこともないようなクラッカーや牛肉や貝柱の缶詰等がありました。

私達が入った糸洲の壕には軍医も衛生兵も看護婦もありました。

しかし平和だったのもほんの数日で、砲爆撃が始まってからは南風原以上の激しさでした。

6月18日の朝10時頃でしたか、敵が壕の上のほうまで来ていて、その日の晩糸洲の壕を出ることになりました。

伊原の第一外科壕へ

糸洲の壕を出る時は、第一外科壕か第三外科壕か山城の本部の3カ所のうちのどちらかに行きなさいということでした。

桑江さんは壕熱にかかっていた、食事もずっと面倒を見ていたので、ぜひ一緒に連れていってくれということでした。ここまできたら死ぬも生きるも一緒だからということで一緒に壕を出ることにしました。

私一人では連れて行くことができないので「ちょっと待っていて」と荷物を預けて上級生を探しに行っているちょっとの間に、桑江さんはいなくなっていたのです。探しまわったのですがいないので、先生にうながされ、自分の荷物を取り壕を出ました。

壕を出たところの拝所にケガをした和宇慶八重さんがいたので、一緒に行くことにしました。

私は伊原が一番近いと思い、伊原に行くことにしました。

途中5、6回の至近弾が落ち、泥まみれになりながら伊原の第一外科壕に着きました。八重ちゃんの傷口からは血がにじみ、傷の手当てを

しようと思ったのですが、私達の持っている救急力パンではだめだからということで看護婦を呼びに行きました。すると看護婦さんは「もう解散しているから手当てはできない」と言い、そこで初めて解散したことを知りました。

壕の入口でできるだけの手当てをして座っていると「秀ちゃん」と声がして、ふりむくとハル姉さん（読谷村出身、旧姓古堅、現在渡久山）でした。

4月の末に別れたきり、ずっと会ってなかった同郷の先輩に会い、抱きついて泣き出してしまいました。「各市町村ごとに組を組んで国頭に突破しなさいということだよ。今さっき壕の入口で大城先生や照屋先生がやられたよ」と、そこでハル姉さんから初めてそのことを聞きました。

それを聞いた八重ちゃんは「解散になったのなら、私も具志川の人を探してみる」ということで壕の中で具志川出身者を4、5人探して出てきました。

その時ハル姉さんが「奥の方に牧原の比嘉ヨシちゃんがいるから会って来なさい」と言っていたので、会いに行こうとしたら「歩ける者は早く出なさい」と兵隊に追いたてられとうとう会うことは出来ませんでした。

南へ南へ

ハル姉さんや宮古出身の宮国節ちゃん達と一緒に壕から出て、具志川の八重ちゃん達とはそこで別れました。それっきり八重ちゃんはどこで亡くなったのかもわかりません。

ご飯らしいご飯は食べていないし、疲れていました。もうひもじさの感覚は無くなっていたのですが、岩陰で少しでもウトウトすると、寄宿舎でみんなと一緒にご飯を食べている夢、家で芋をたくさん炊いて、その芋の中に手をつっ

込んでいる夢等食べる夢だけを見ました。

南部には防衛隊もたくさんいました。6月19日の晩8時頃の海岸には、こんなにたくさんの人がいるのかと思う程、あっちに行く人、こっちに来る人でごったがえしていました。「喜屋武岬から突破する」という人もいるし「あっちはダメだから東に行く」という人もいました。島尻あたりの地理もわからないし、地元の人も少ないし、いたとしても道を教えてくれるわけでもなかったので、道もわからないような人ばかりが右往左往していました。

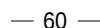
道のあちこちに死体があって、道すがら死んでいる人達を見ると、着ている服もいっぱいになるほどバンバン腫れて、大きな銀縄がいっぱいたかっている、人が通る度にブーンブーンと飛んでいました。それを見て死んだらこんなになるのかと思うと、なるべく人の目に晒されないで死にたいと思いました。

19日の晩、国頭へ突破するのに陸からにするか海からにするか相談しました。私達3人は陸で死んで死体を晒されるよりは、海からにしようということになり海に向かいました。

沖に向かっていたら、敵は海まで来ていて機関銃の弾が飛んできました。月夜だったので、沖の方から泳いで逃げる人も見えました。泳ぎに自信のある人は沖のほうまで行ったのですが、私は泳げないのでそんなに沖のほうまでは行けませんでした。海の中に頭を入れたり出したりしながら海の中を歩いていたら、海の中にあった弾痕に落ちてしまいおぼれそうになり3人とももがきました。ハル姉さんは都屋の人で泳げるので、泳いで岸に上がり、その次に私も何とか岸に着きました。ところが節ちゃんはだんだん沖に流されて行ったので、二人とも大きな声で「節ちゃん、節ちゃん」と呼びました。その時、側から兵隊が通ったので「兵隊さんあの人を助けて下さい」と言ったら「いいよう

そして明け方になると、海岸なのに真水が出る場所があったので（ウスカー）そこに水を

その日は静かな朝でした。ところが10時か11



時頃海岸に戦車がやって来て、潮のひいた海岸べりを進みながら、火焰放射機で攻撃してきたのです。

米兵が来ているということで大騒ぎになり私達が出て行く前に、近くにいた那覇商業生の親子も自決し、私達が出て行ってから壕の中にいた中尉も自決しました。

私とハル姉さんと節ちゃんはあの岩陰からこの岩陰にと逃げるつもりでした。そして死に場所をみつけて自決するつもりだったのです。一人でやったらみんなに迷惑になるので3人一緒に手榴弾で死のうと思っていましたが、機を逸し「やらんでおこう」ということでハル姉さんが最初に手榴弾を置きました。敵が目の前に来て捕虜になりました。ふりむくと自決した人達の手榴弾の白い煙が見えました。

アメリカ兵が銃を担いでやって来て、身体検査されました。その後座っていると、ガムや食べ物をくれましたが、私達は口にしませんでした。カンカン照りの暑い日でした。

アメリカ兵達が戦時中にもかかわらず、アメリカ本国からの手紙をお互いに見せ合っていたのは考えられない風景でした。と言うのはアメリカ兵は鬼だと教えられていたし、こんな激戦なのに手紙が届くということ自体が私達には考えられないことでした。まるで別世界のことのようでした。

その日は兵隊達も、禪や白い旗を掲げて海岸で捕虜になりました。その日捕虜になった人達は集められて、たくさんの捕虜のいる収容所に連れて行かれました。

そこに行くと最上級生である本科2年の比嘉キヨさん（現在森田）がいました。泣いている私達3人に「そんなに泣くんじゃないよ。あんた達だけじゃなくて百名には西平先生も捕虜になっていらっしゃるというから、そんなに心配しないで」と慰めてくれました。それでホッと

しました。それから少し心の余裕も出てきました。

悪夢

戦争が終わって15年ぐらいは戦争の話は全くしたくありませんでした。何とかして忘れよう、忘れようとそれだけが頭にありました。あんなむごいことは早く忘れたかったのです。だけど忘れてはいけないということではいろんな人が体験記を書いているのを見て、思い出して記録し始めました。

戦時中大ケガはしなかったのですが、その時の無理がたたって、終戦になってからも7年ぐらいは喘息で苦しみました。壕の中で弱っている上に、海の中から逃げたり、1週間も飲まず食わずで雨にうたれていたもので、石川に来てから悪性のマラリアに罹ってしまいました。マラリアで1カ年ほど苦しめられました。それが直ったと思ったら今度は喘息になりました。昭和35年くらいまで、結婚する頃まで喘息は続きました。そういう状態で体の具合も悪いので戦争の話をしたくなかったのです。体が弱いので家にこもりがちでした。何とか忘れて戦争から逃れたい気持ちが強かったのです。どうだった、こうだったということも言いたくなかったので、母や兄弟に聞かれても戦争の話はしたことはありませんでした。

戦後になってからも、伝令に行って追い回される夢を見て冷汗をかくことも多かったのですが、最近になってようやくその夢を見なくなりました。みんなそうらしいですね。同級生に会うと「やっと最近になって戦争の夢を見なくなったよ」と言っています。地上戦では弱い者が真先にやられるということを身をもって知らされた体験でした。

（1990年5月22日採録）

私の戦争体験

国 吉 ト ミ

昔ながらの小石を積んだ石垣囲いにガジマルのつるがたれ、さわやかに暮れるこの沖縄に戦火の花火が散ろうとは誰が予想し得たろう。

小咄の島、夢の島と詠われ、人間味豊かな情緒を帯びた平和な村々に太平洋戦争の終期を記した。

当時私は、日本陸軍戦闘指揮所に勤務していた。その時の生き残りが、儀間玉栄（渡慶次）さんと旧姓比嘉秀子（座喜味）さんです。昭和20年1月2日に指揮所は空襲された。ここは、飛行機の離着陸を受信し、暗号と秘密を本部に知らせる役目をしていた。この場所は、読谷飛行場の西側にあって大当の空家を使用していた。

午後8時10分、耳をつん裂くかん高いエンジンの音と共に3mくらいに低空して来た3機編隊の敵のグラマンに攻撃された。ビューボン、ビューボンと頭の上や耳をかすめて飛ぶ火花、当たると死ぬとも考えずぼうっとなり、身をちじめるだけだった。弾は豊沢伍長の胸下に当たった。「うわっ！」と叫んだ。隊長は誰よりも先に逃げた。私も逃げた。伍長は書類を包むために弾に当たったであろう。何人かの兵隊や住民も犠牲になった。

午前11時ごろ空襲は止んだ。私も改良釜でシンメー（大鍋）をかぶり、親指を耳に当てて伏せていた。壕からは続々と負傷した者、無傷な人達が出て来た。豊沢伍長は五本の指で床にしがみつき、血の海にあえいでいた。「お母あー、おふくろ、水をくれ、水、水ってば」と、だっ子みたいに死の直前までお母さんにあまえていた。大粒の涙を流しながら、口や鼻からは息をするたびに血が吹き出る。「お父ー、ごめんよ」

とも言った。父に「死んで帰れ」と励まされた盃。自分の死を犬死にみたいと思ったに違いない。隊長殿が「楽にしてやれ」と宮沼軍曹に命令。どどーんと一発射った。手足を痙攣させながら大学を出た若い命は、散った。皆、手を合わせた。

戦死した息子の遺骨が届けられた時の親の悲しみを思うと胸が痛んだ。子を想う心は今も昔も変わるまい。「親想う心に勝る親心、今日の訪れ何如と聞くらむ」と吉田松陰の最後の詩が分かる気がする。

毎日のように飛行場めがけて空襲される度ごとに死ぬ兵隊、首が胴から離れて噴水のように吹き上る血、焼けこげて性別も分からなくなった人、こんな有様を見て、敵愾心は湧く「仇を討つぞ、勝ってやるぞ」と愛国心に燃える日本女性の1人、大和撫子であった。

3月に入って、ヒケ三の暗号で除隊された。隊長が「大和撫子はいさぎよく死ねよ」と言った。「豊沢は幸せ者だ。俺たちは跡形もなく土と果てるだろう。妻子を持たなかったのが何よりの慰めだ」と言って散った。若い20万余の兵隊がその通りになった。島全体が敵に包囲され、もう駄目だということだった。

日夜通しての大空襲・艦砲射撃とありとあらゆる兵器の攻撃を受けた。昼は砂煙、夜は照明弾、壕から一步も外へ出られず、子供達は腹を空かして泣けば「壕の外に出ろ、泣き声を聞いて爆撃されたら皆の命を失うから」と死を惜しむ争い。隙を狙って弾をくぐり、食を求めに行く。親は子を、妻は夫をと肉親の無事を案じたら沖縄県民は、戦争の真ただ中に溺れた。

4月1日午前1時、敵軍は砂辺の浜から上陸し、日本軍の通信を断ち切ったようである。金や食糧のある人たちは早く避難したが、最後まで残ったのは頑固者と貧乏者だった。「壕にいる者は皆逃げろ、敵が上陸してきたよ」と、消

防団員は叫んでいた。乳幼児をおぶる者、足をひきずる者、病める者が各自持てるだけの荷物を持って逃げた。

どこからともなくやって来た避難民は、国頭を目指して声を殺し乍らただ歩くのみ。日本軍のトラックはライトを消し、木の枝で擬装して島尻へと猛スピードで行き、皆必死だった。暗闇は動いている。幾夜が続いた雨に濡れて道はぬかるみだらけだった。雨の中を飢えと、疲れで何日も歩き続けたが、何処をどう歩いているかも分からなかった。家族がはぐれても振り返る余地も気力もなくしていた。それで、夜明けに山に着いた時、ボーチャー（頑固者）の父がいないことに気づき、母は殺されたと思い、心配したが、自分たちも行く先どうなるか分からないし、と思うと父のことなどどうでもいいという気持ちになっていた。持っていた荷物も、疲れるにつれ1つずつ捨ててしまい、ただ乾燥した小魚だけを残し、全く着のみ着のままで、もう命なんてどうでもいいと、やけくそになっていた。

山や民家が燃える、敵機は飛ぶ、海は米軍の船で埋めつくされていた。家畜が腐って異様な臭いがしたが、もしや自分の肉親が倒れているのではないかと胸が痛んだ。

戦争に負けた沖縄は変わっていった。心魂ついて民家に入り、初めて人の物に手をつけた。鍋の中の腐ったオカラを分け合って食べると、間もなくしてお腹をこわし、なお栄養不良になり、ふらふらになった。身近に米軍を見た時、本当に日本軍は負けたんだなぁと思ったが、誰も死ぬことは出来なかった。鍋のすすと土を体中に塗り、着物を裏返しにきて、縄帯をしめ、身を守った。それは、日露戦争帰りの叔父が教えてくれたことだった。

それから、覚悟を決めて捕虜になった。トラックに乗せられ、降された所は金武だった。多く

の避難民がいた。同じ村の人もいた。米軍による食糧の配給で腹を満たした。「もう、アメリカがいい、友軍が敵だ」と言う人もいた。自分は愛国心は捨てなかった。心のやさしい人、私欲の強い人、様々な沖縄人同志の争いも絶えなかった。人の心は変わるものだ。自分も変わった。どうせ敗戦国の民だと思い、他所の家の軒下にテントを張り、ひとまず落ち着いた。

父の行方は知らぬままに時は過ぎた。ある日のこと、MPが「ムツメ、ムツメ」と入って来て自分を連れようとした。母は手を合わせて「命を助けて下さい」と頭を地面につけて泣いて哀願した。外には4人の若い娘が立っていた。若い者は看護婦として働かされた。島尻からの負傷者の看護である。金武小学校の庭いっぱいにテントを張り、俄か病院が出来ていた。何百人かの住民が運ばれてきた。うなる者、泣く者、わめく者、死の直前の人間は、見境も義理だてもない、全く動物そのものである。地獄の絵巻きを見るような気がした。

私は、両手と片足を失った40歳位の母親と生後8ヵ月位の女の子の看護に当たった。母親は意識不明だった。足の切り口は深い穴があき、ウジ虫がいっぱいわき出ている。それを紙切れで取り除いたり、水を飲ませりした。女の子は、人見知りして泣くが、声がかすれて出ない。お乳を吸われた母親は体中がむくんでいたように思う。髪は汚れ、顔は垢だらけでまるでやせ猫みたいである。通訳の二世は午前8時より午後5時まで勤務せよ。夜は米兵が見ると命令的に言った。1日が終わって明日また、受け持ちのベットに附いた。

乳飲み児の母親は死んだ。そうとも知らずに無心にお乳を吸っている女の子。こんな小さな子どもまで戦争に巻き込まれた。亡くなった母親を見つめながら、その女の子があまりにも気の毒で思わず泣いた。自分達が受けた戦争の悲

しみよりも、島尻の方はひどかったのね、と、また泣いた。死亡したことを米兵に知らせると、2、3人来て、女の子はタオルにくるんで、そこを去ろうとした時、母親の所に手を伸ばした。泣き疲れた小さな顔はしかめっ面していた。母親は近くの畑に埋められた。あの時の女の子が今生きていれば、きっと美しい奥さんになっていることでしょう。

大日本帝国は、国民が鮮血を流して天皇のために、お国のために尊い命を捨てると、国民に間違った教育で統一した。老いも若きも「欲しがりません勝つまでは！」と大和魂に練り固められ、勝利を信じて真っすぐに命を捨てた数万人の犠牲者のことを思うと、2度と戦争を起こさないように祈るのみである。秘密+暗号の大本営は、負けていても勝っていると言い、米の兵器には制限があるが、日本魂には制限なしと発表する日本軍隊、秘密を漏らした者は、親戚一族に及ぼす恐ろしい重罪。人間性を無にした軍隊の有り方、あの残酷さは胸の奥にしまって触れないでおこう。今でも思い出すと胸が痛む。肉親を失った自分が受けた戦争体験の中から一部だけ書いてみた。

あんな残酷な悲しみを子や孫たちに受けさせたくない。1日2食だとしても戦争はやらないで欲しい。その後遺症は一生治らないであろう。日本軍の戦争準備は小学2年生から、敵の戦車を落すための溝掘りや、落下傘兵を竹槍で突き殺せとか、爆夷弾をバケツの水で消せ等々の猛訓練は、米軍の兵器には役立たなかった。却って鎖をつけた動物みたいに、よくも教育されたものだと哀れんだという。清らかな精神を持つ子どもたちの教育は考えるべきだと思いながら綴ってみた。(昭和55年6月17日)

(『ゆうがお会報2号』より転載)



編集後記

この度、3回読谷村平和創造展を開催するにあたり、小誌『平和の炎 Vol.3』〔読谷村民の戦時体験記録1〕を編集いたしました。これは読谷村民の沖縄戦における苦難に満ちた体験を聞き取り調査し、主に県内での体験を収録いたしました。同誌では各々の体験記を「住民の体験」「兵隊・防衛隊・軍属の体験」と2部構成に分けて掲載しております。一人ひとりの戦時体験は、性別や年齢の違い、また同時の職業・立場によって、あるいは県内はもちろん県外そして国外のさまざまな場所によっても全く異なる様相を見せてくれます。そのような色々な角度から多くの村民の体験を、また思いを継続して調査して行くことにより、非戦の叫びを大きなうねりにして行きたいと考えております。今後、調査協力をお願いする際はどうぞよろしくお願いいたします。

もし、ご自分の「戦争体験記」を書き残すために早めに調査してほしいという方がいらっしゃいましたら読谷村史編集室（代8-2201）までご一報下さい。

なお、小誌を発刊するにあたり、聞き取り調査を快く応じていただき、また掲載に対しましてご快諾いただきました体験者各位に、そして以下の方々、あるいは機関に貴重な写真をご提供いただきました、衷心より感謝申し上げます。

沖縄県立平和祈念資料館、宮崎県えびの市立加久藤小学校、嘉手納町史編集室、大湾トキ、比嘉秀（敬称略）衷心より感謝申し上げます。

1990年8月1日

平和の炎 Vol.3

第3回読谷村平和創造展

編集 読谷村役場 総務部 企画課

発行 読谷村役場

〒904-03

沖縄県読谷村字波平37番地

109895(8)2201

印刷 オフセット沖縄

沖縄市山内4-2-24

109893(3)0701
